

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月28日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520460

研究課題名（和文）

日韓役割語の相互学習支援と参与観察研究-ネットを介した物語創作の協同活動-

研究課題名（英文） Online peer learning of Role Language between Japanese and Korean language learners

研究代表者

鄭 惠先（JUNG HYESEON）

北海道大学・国際本部留学生センター・准教授

研究者番号：40369856

研究成果の概要（和文）：本研究では、実際の言語教育現場で活用できる、もっとも効果的な役割語習得法として「ネットを介した、学習者主体の相互学習システム」を提案・実践し、その効果を検証した。協同活動の場として SNS コミュニティーを利用し、「役割語」をテーマとした日韓・韓日翻訳活動を行った。この活動を参与観察した結果、日韓両言語学習者同士の「学習&支援」者としての相互学習の効果により、両言語の役割語意識が活性化したことが確認できた。

研究成果の概要（英文）：This study was designed to support peer-to-peer collaborative learning between Japanese learners of Korean language and Korean learners of Japanese language. The learners co-operated each other through peer discussion to translate Role Language in Japanese and Korean. We used online community and social networking system for the activities. These types of practices are effective in the activation of knowledge and strategies of Role Language to Japanese and Korean language learners.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：役割語、言語教育、ネットコミュニティ、社会言語能力

## 1. 研究開始当初の背景

「役割語」とは、特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）に刷り込まれている特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を指し、金水敏（2000）<sup>(1)</sup>によって提唱された用語である。日本語において、役割語を決

定づける代表的な言語現象としては、「おれ、ぼく、あたし、わし」などの人称代名詞や、「わ、ね、ぞ、ぜ」などの終助詞をあげることができる。

金水（2000）を皮切りに日本で役割語研究が本格化してきたことを機に、本研究者は平成18年～20年度科学研究補助金（基盤研

研究 (C) 研究課題名：日韓対照役割語研究—相互翻訳と言語教育の視点から— 課題番号：18529341) を受け、日本語と韓国語の役割語の対照研究を行ってきた。なお、平成19年度～22年度科学研究補助金(基盤研究 (B) 研究課題名：役割語の理論的基盤に関する総合的研究 課題番号：19320060 研究代表者：金水敏) では連携研究者として共同研究を行うことで、さらに研究の幅を広げてきた。

当初、本研究は「日本語と韓国語の翻訳本の中で役割語がどのように扱われているか」「役割語の語彙や語法が持つ独特のイメージが翻訳本の中でも正確に伝わっているか」といった日韓翻訳の側面での観察、分析、検証から始まった。その研究成果を含めて、本研究開始までの研究の流れを大まかにまとめると以下のとおりである。

- (1) 出版物や映像物、対訳資料などを考察し、役割語の使用実態を把握した上で、両言語で役割語を生み出す具体的な言語形式を細かく提示した(文末表現、方言など)。
- (2) 上で提示された両言語での役割語的要素について、日本と韓国の4地域で両言語母語話者への意識調査を行った。
- (3) 上の意識調査では、韓国人日本語学習者への調査も付け加えることで、両言語学習者の役割語習得のストラテジーを分析した(日本語母語話者との相違を検証)。
- (4) 上の分析結果をもとに、実際の日本語教育現場にて韓国人学習者向けの役割語教育を試み、学習者の意識向上に役立てた(「日韓翻訳演習」の指導で活用)。

以上の研究結果から、「両言語間での役割語翻訳の質の向上」と「日本語教育での役割語の学習項目化」という本研究本来の目的の基盤を作った。

(1) 金水敏(2000)「役割語探求の提案」佐藤喜代治(編)『国語史の新視点 国語論究』第8集、明治書院、Pp. 311-351.

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、韓国人日本語学習者と日本人韓国語学習者の両言語役割語の相互学習を支援しながら、活動の中で交わされる議論を分析し、その結果を日韓対照役割語研究の発展にフィードバックすることである。

本研究開始前までの研究では、対訳資料の分析と意識調査による対照研究が主なアプローチ手法であった。そして、その結果を応用すべく、上級韓国人日本語学習者への日本語役割語教育を試験的に実施し、役割語教育

の必要性と効果を確認した。その上、ネットコミュニティを利用した学習者主体の相互学習システムを実践し、その効果を検証した。そして、その協同活動を参与参観することで、新たな役割語データを収集し、理論的な裏付けをさらに充実させていった。

## 3. 研究の方法

本研究の具体的な実行方法は、以下のとおりである。

- (1) 日本と韓国の研究拠点となる各教育機関で、これまでの役割語研究の成果を具現化した共通のシラバスを作成し、それをもとに実際の役割語教育を行う。
- (2) 上記と並行して、韓国人日本語学習者と日本人韓国語学習者が、在住地域を問わず集まることができる、協同活動のためのコミュニティ空間をネット上に構築する。
- (3) 互いの母語に対する役割語知識と、上の1での役割語教育の成果をもとに、協同の日韓両言語版「物語」の翻訳・創作活動を行う。
- (4) 本活動での学習者間の意見交換内容を考察・分析し、その結果を役割語研究理論の補完に活用する。

以上のように、本研究は「共通シラバスを使った教室内での役割語教育」「ネットコミュニティを使った相互学習体制の運営」「参与観察による役割語データ構築と研究理論へのフィードバック」という3つの方法で進められた。

具体的には、まず、①日韓3カ所の教育機関にて、研究開始時に作成中であった「日韓役割語教育シラバス」による学習を行い、②同学習者同士のネットミーティングシステムを開通した。その中で、両言語役割語についての共通理解や相互学習のシステムが構築できたら、次の段階として、③より参加者の幅が広く自由度の高いコミュニティ空間として、常時開設ブログを新たにスタートさせ、④ブログ上で日本語または韓国語で書かれた大衆文化作品をとりあげ、本格的な日韓・韓日翻訳の協同活動を展開していった。同時に、掲示板やレスなどで議論になったホットトピックから、⑤役割語データを新たに整理し、その結果をもとに、⑥「役割語教育シラバス」の改善と「日韓対照役割語研究」の理論的補完を行った。

## 4. 研究成果

本研究は、大きく2つの特色を持つ。

まず、「社会文化的な言語要素である「役割語」特性の活用」である。金水(2000)で

は、役割語知識について「特別な教育で身につけた訳ではなく、普通の日本語の母語話者として日本で暮らして行くだけで身に付くものであり、しかも多くの人々が共有しているものである (p. 323)」と述べている。このように、役割語は非常に社会文化的要素が強い言語形式である。よって、日韓両言語学習者同士の「相互学習」「物語創作の協同活動」という本研究のテーマは、役割語の特性を十分に生かした独創的な言語学習法である。なお、役割語を学習項目とした協同活動の中で、日韓両言語母語話者の間で交わされる議論は、まさに役割語データの宝庫である。よって、本研究の結果を日韓対照役割語研究の理論の充実に応用するという相乗効果も大いに期待できるのである。

本研究のもう1つの特色は「教室活動とネットコミュニティの融合」で、これまで主に教室が活動の場だった言語学習者間の協同活動に、ネット通信システムを併せることで、効果の極大化を目指すということである。今までは、「学習＝教室活動」「コミュニティ＝ネット」の図式が一般的だったので、本研究のような構想はこれまでにない新しい試みであると考えられる。まずは、日本語教育の現場と韓国語教育の現場を役割語教育の2つの拠点として運営し、そこでの教育の成果をもとに、ネット上で学習者同士の相互学習体制を構築するという、重層的な言語教育・研究体制である。議論の場をローカルからグローバルに移して活動の輪を拡大すると、より多様で幅広い話し合いが可能になり、協同活動の成果物である創作作品の言語面での質も高まるはずである。また、役割語という学習項目の特性上、このような学習者主体のオンライン相互学習システムは、とくに日本のサブカルチャーに興味を持つ若い世代を中心に活動が活発化することが予想され、今後の言語学習法の1つの可能性を示す研究としても非常に意義があると考えられる。

以下、年度別成果の詳細について述べる。

#### < 21年度 >

21年度にもっとも力を入れて主に取り組んできた活動は、ネットコミュニティを使った相互学習体制の構築と定着であった(より参加者の幅が広く自由度の高いコミュニティ空間としての常時開設ブログ)。具体的な流れは以下のとおりである。

- (1) 日本と韓国あわせて4カ所の教育機関にて勤務中の研究協力者の協力を得て、各研究協力者が指導した両言語学習者を推薦してもらった。(研究協力者：北海道大学／研究代表者及び佐藤恵理講師、韓国江原

大学校／恩塚千代招聘講師、京都外国語大学／坂口昌子准教授、長崎外国語大学／ヤン・ジョンソン講師)

- (2) 推薦してもらった学習者を参加メンバーとするネットコミュニティーシステムを開通した。まず、無料公開型 SNS の mixi、GREE、My Space、freeML などを検討して試行を行った後、freeML に「日韓役割語相互学習倶楽部」という非公開コミュニティーを開設した。当初の参加学習者は、韓国人日本語学習者6名、日本人韓国語学習者5名である。以降、活動の成果を見守りながら、もっと参加者を増やしていくことに力を注いだ。
- (3) コミュニティーの中では、まず両言語役割語についての共通理解や相互学習のための関係作りを行った。

以上の活動の様子は、パネル・ディスカッションやシンポジウム発表の形で、報告を行っている。

#### < 22年度 >

21年度から運営してきた SNS コミュニティー「日韓役割語相互学習倶楽部」の活動を続けた。22年度の活動メンバーは、韓国人日本語学習者6名、日本人韓国語学習者5名、現職日本語教師のサポーター4名で初年度と変わらない構成であったが、その間にメンバーの交代があった。22年度は具体的に、「役割語」をテーマとした、日本語漫画の韓国語訳という課題翻訳活動を行った。活動は、ペアによるレビューと、全体でのコメント合戦という2つの方式を織り交ぜて行われた。その中で、互いが学習者でありながら支援者であるというメリットが活動の質の向上に十分に生かされていたことが、参与観察の結果明らかになった。

上記の活動から得られた情報をもとにした「日韓役割語対照研究」における研究成果を、学会発表やシンポジウムを通して報告しており、それぞれの報告の概略は以下のとおりである。

- (1) 「2010 世界日本語教育大会 (台湾国立政治大学) : 現代の日本語学習者の学習動機やネットコミュニティなどの発展に照らし合わせてみたときに、大衆文化作品に多く表れる「役割語」を日本語教育の指導項目として取りあげることへの意義を唱えた。
- (2) 第35回日本語教育方法研究会 (金城学院大学) : SNS コミュニティー上での CMC 活動が言語学習に有効であることと、学習者 & 支援者というダブルロールを設定することで起こる相乗効果について、具体的な

活動例をあげた上で明らかにした。

- (3) 公開シンポジウム「役割語・発話キャラクター研究の展開」(大阪大学) : ペアレビュー、コメント合戦といった CMC 活動の中で、学習者の役割語に対する意識がどう変化していったのか、学習がどう進んだのかに注目し、本活動が学習者の気づきとスキル向上に役立っていることを証明した。

< 23年度 >

最終年度の23年度に活動の課題として注目したのは韓国ドラマの日本語訳であり、とりわけ注目して行った議論は、両言語による映像メディアの中での言語的特徴である。本活動から得られたアイデアをもとにした研究成果は、次の学会発表を通して報告している。①「日韓対照によるメディア言語研究へのアプローチ-映像メディアのジャンルによる言語的特徴を中心に」(第36回メディアとことば研究会) ②「日韓対照の観点から見た映像メディアの言語的特徴」(2011 世界日本語教育大会)

発表の内容を簡単にまとめると、日韓両言語による映像メディアを対照した結果、①日本語から韓国語への言語切り換えに、普通体から丁寧体への意図的な変形プロセスが見られる、②韓国語から日本語への言語切り換えに、意図的な「キャラクターの再創出」が観察される、という2点が明らかになったということである。

ただし、この結果は断片的な例にもとづく一次的な結論に過ぎず、予備的研究として位置づけられる。今後は、これまでの「日韓対照役割語研究」の枠内で行ってきた対訳資料分析のノウハウを生かし、「日韓対照を通じたメディア言語研究」に研究の枠を広げたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

鄭惠先 (2010) 「役割語を主題とした日韓翻訳授業の実践-課題遂行型活動を通しての気づきとスキル向上-」 「役割・キャラクター・言語-シンポジウム・研究発表会報告-」、科学研究費補助金基盤研究 (B) 「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」研究報告書 (課題番号: 19320060、研究代表者: 金水敏)、pp. 101-112

鄭惠先 (2010) ネットを利用した日本語教育の動向と今後の可能性-北海道大学留学生センター「日本語教授法ワークショップ

2010」報告-『日東學研究』2、pp. 111-133

[学会発表] (計7件)

鄭惠先 (2012) 「日韓対照によるメディア言語研究へのアプローチ -映像メディアのジャンルによる言語的特徴を中心に-」、第36回メディアとことば研究会、2012年3月9日、東洋大学

鄭惠先 (2011) 「日韓対照の観点から見た映像メディアの言語的特徴」、2011 世界日本語教育大会、2011年8月21日、天津外国語大学 (中国)

鄭惠先 (2011) 「SNS 活動「日韓役割語相互学習倶楽部」への参与観察報告-カキコミに見られる両言語学習者の役割語意識-」、公開シンポジウム「役割語・発話キャラクター研究の展開」、2011年2月5日、大阪大学

鄭惠先 (2011) 「韓国人を対象とした日本語役割語教育の意義と方法」、第104回在韓日本語講師研究会特別講演会 (招待講演)、2010年10月2日、時事日本語学院 (韓国)

佐藤恵理・鄭惠先 (2010) 「オンライン日韓両言語相互学習システム」における協働翻訳活動の効果」、第35回日本語教育方法研究会、2010年9月11日、金城学院大学

鄭惠先 (2010) 「「日韓翻訳演習」授業における役割語教育の効果-学習者への意識調査にもとづく授業実践の試み-」、2010 世界日本語教育大会、2010年7月31日、国立政治大学 (台湾)

金水敏、岡本友子、鄭惠先、恩塚千代 (2010) 「パネル・ディスカッション「日本語教育に活かせる役割語」、役割語研究会シンポジウム、2010年2月20日、江原大学校 (韓国)

[図書] (計1件)

金水敏・鄭惠先ほか、くろしお出版、『役割語研究の展開』、2011、pp. 71-90

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

日韓役割語相互学習倶楽部

<http://www.freeml.com/yakuwarigo>

<http://mithrandir.iic.hokudai.ac.jp/jung/OpenPNE3/web/community/1>

(両者とも非公開 SNS サイト)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

鄭 惠先 (JUNG HYESEON)

北海道大学・国際本部留学生センター・准教授

研究者番号：11333769

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：